

“移動”で届ける新たな“価値”

執行幹部

筒井 洋

Hiroshi Tsutsui



皆さん、どんな未来を創りたいですか。一人ひとりがまず前提をおかずに“創りたい未来”を描き、それを実現するための技術や手段を考え、挑戦してみるのはいかがでしょうか。

自動車業界のみならず世界はどんどん変化しています。先行きが読めず、これまで正解とされていたものが必ずしも正解ではなくなるかもしれません。これまでの延長線上で考えるのではなく、未来を先読みして目指す姿を描きながら、実際に行動に移してみてください。

私が実現したい夢は、「新しい“移動”の創造により価値を提供すること」にあります。安心・安全を基盤として、今までのA地点からB地点への移動ということだけではなく、楽しさなどそれ以外の価値観を生み出して行こうと考えています。そして究極の夢は、「どこでもドア」や「タイムマシン」で移動するドラえもんやのび太を彷彿させる、“移動”による幸せを感じられる社会の実現なのです。

「個の時代」である現在、“この製品はこう使う”と、既存の価値を定義づけて提供する時代ではなくなりました。人それぞれ、また環境によってもニーズは全く異なります。社会課題も地域によって異なります。さらに、お客さまのニーズは時間軸でもめまぐるしく変化しています。

例えば、一つの新たな製品を高機能化することが目的を達成する手段ではなく、性能・機能別で考えて別の製品として簡素化して実現したり、別の機能を追加したりするなどの工夫も必要です。もちろん、社会の一員として地域や地球環境に貢献するという視点も欠かすことはできず、スピードと、顧客視点、社会課題の解決を満たす製品・サービスを提供することが、私たちに求められていると考えています。

従来の「100点の段階でアウトプット」の進め方が必ずしもお客さまのニーズにこたえることはありません。ニーズの変化が激しい時代だからこそ、1年前なら100点だったものが、いま提供したらすでに価値が50点に下がっていることもあります。お客様にとって価値あるものを提供する、お客様にとって不要な機能・性能を過剰に提供しているということはないでしょうか。ただ1つ

言えるのは100点だろうと80点だろうと、社会に提供しない限り価値はゼロということです。

お客さまのニーズは机の前で考えていてもわかりません。ニーズを満たす製品を創り出す一番大切なことは、動き出すことだと考えます。まず一步踏み出すことが重要です。日々の挑戦は大きなことである必要はありません。「何もしないことが最大のリスク」であり、一人ひとりの意識で未来は変えられるのです。

難しいテーマに挑戦すれば失敗はつきものです。高い目標を設定し、メンバー全員がチャレンジするために大切なのが、“失敗から学ぶ”ことです。それにより、その挑戦の結果は“失敗”ではなく、“学び”に変化します。挑戦するという行動が評価され失敗が許容されるのは、多くのことを学ぶことができるからです。

強い組織とは、「ワンチーム」でありたい姿を共有し、一人ひとりが夢や目標に向かって挑戦できる組織だと思っています。メンバー同士が互いの力を補完しあえる関係も大切です。良い成果を挙げるチームには、メンバー同士の相乗効果がありエネルギーが効果的に機能しています。メンバー全員が“チームでこのハードルを乗り越えて行く”という想いが、幾多の壁を乗り越える原動力になるのだと思います。

さらに業務スピードは周りを巻き込むことで加速します。部署を越えた連携や、アイシンググループのみならず外部との連携も一つの大きな創造力なのです。競争ではなく、自分の力を使って相手の力を引き出す、相手の力を使い自分の力を上げて行くことで、社会環境やお客さまのニーズの急激な変化に対応した価値の提供をスピーディーに実行できるでしょう。

新しい業務となると、まずは仕組みづくりを…となりがちですが、仕組みにこだわらず、各テーマに適応したやり方を探るためにも動くことからトライしてほしいと思います。「これまでのやり方」がではなく、仕事をしていく中で“状況にあった方法を選択していく”。時代の変化にアンテナを立て、様々な情報を取り入れながら挑戦を続ける。その活動をすることにより、これまでの皆さんがアイシンで養ってきた技術力が自然と活かされるイノベーションを生み出し、新たな製品、価値の提供につながり社会全体を変えていくことができると思います。

今年度の技報の特集では、eAxle/EVユニットをはじめとする電動化商品の推進について掲載しています。これは言うまでもなくカーボンニュートラルに向けての取り組みの一環であり、私たちはクリーンで持続可能な社会を目指して様々な開発やイノベーションを行っています。

「“移動”の自由と喜び、そして未来地球に美しさを運び続けること」…

これが私たちの力でできたら、とても嬉しいですね。